

グドラト・イスマイルザーデ  
バクー国立大学教授

# 日出ずる国の不朽の詩人

随分昔のことになるが、1957年にバクー国立大学を卒業した私はアゼルバイジャンの人里離れた山奥に放り出されることとなった。見た目にみずぼらしい家が並ぶ隔絶された村の、老朽化により半分壊れかけている学校の教師になったのだ。村の子供たちに祖国の歴史と、少なからず知っていたロシア語を教えた。

戦争はだいぶ前に終わっていたにも関わらず、ここは未だに貧困が蔓延っていた。光も温もりもなかった。まるで皆に忘れさらられてしまった土地のようだった。この村へは荷役用の動物に乗って行かなければならず、村の農民たちは、自身も子供たちも食べていくのがやっとであった。冬は、雪が長い間周りを閉ざしてしまうため、特に厳しか

った。道という道は閉ざされ、白い静寂は人間の生活のやり切れなさを容赦なく強調していた。

しかし、この一見忘れられたかのような地の果てはアゼルバイジャン南部に位置し、いわゆる「資本主義国家」と国境を接している地域であった。強大な帝国、ソ連（アゼルバイジャンもその構成国家の一つであった）の国境を守るべく、ここにはロシア軍が駐留していた。もちろん、ロシア人将校や兵隊の生活水準は高く、彼らのお陰で地方行政庁舎に本屋が開店した。そこにはモスクワから東洋・西洋の古典文学が運び込まれていた。しかし、ロシア軍人が本に興味を持つべくもなく、バクーでは手に入ることのない貴重な文学の傑作をこの本屋では見つけることができたのだ。

ある日、学校の仕事の関係で庁舎に行くことになり、

本屋も覗いておこうと考えた。この時、ある本棚の隅にロシア語で書かれた小さな本を見つけた。表紙には山、雲、奇妙な形の松が描かれている。これは、日出ずる国の詩人の詩集であったが、私はこの詩人を知らなかった。詩人の名前は石川啄木。日本人が愛する詩人の一人であるということを知ったが、ここでは残念ながら彼のことは知られていなかった。

このようにして私にとって未知の世界が開けることとなった。その世界は、とても繊細な人間が抱く心の悩みの驚くべき色合いで満ち溢れている。彼の心の悩みは、この厳しい地の果てで不安に満ちた私の考えや感情に共鳴した。そうして、村の新米教師である私は、特に暖かい感情と親近感を感じさせてくれる彼を好きになったのだ。この本は『我を愛する歌』、『一握の砂』、『悲しき玩具』、

『呼子と口笛』等のタイトルが付けられた詩の連作から構成されていた。詩の一つ一つが芸術的思考の傑作だった。そこにはある瞬間を描いたものもあれば、生死の意味や大きな愛と友情について深く哲学的に考えたものもある。作品全てが高いヒューマニズムに貫かれている。

長い冬の夜、石油ランプのぼんやりした光の中で毛布にくるまり、初めて私はこの珍しい詩を読み、その哲学的本質を突き止めたいと思った。彼の作品は、完璧とは程遠い現代の気忙しい世界に対する深い同情に貫かれているように私には感じられた。

人ひとり得るに過ぎざる事をもえて  
大願とせし  
若きあやまち

智慧とその深き慈悲とをもちあぐみ  
為すこともなく友は遊べり

あの遠い村で数年間教師を務め、村を離れた。だいぶ昔のことだ。バクーに戻ってからは、考古学者になった。現在、私はバクー国立大学の教授となり、考古人類学部長を務めている。しかし、石川啄木の詩が書かれたあの小さな本は常に私と共にある。

過去、いくつもの考古学遠征や小旅行に参加した。数々の国を訪れたりもしたが、いつも偉大な詩人の地味で小さな本を携帯していた。この



本は繊細な情感と真の人間、この地球上の住民の心の悩みを具体的に示していた。

人といふ人のところに一人づつ囚人があてうめくかなしさ

私がこの偉大な詩人と彼の輝くような独特の作品、悲劇に満ちた作品を知った日から50年以上が過ぎた。この間に私は何度か本州の北東にある玉山村を心の中で密かに訪れた。この村で1886年2月20

日、村の貧しい住職の家族に一（ハジメ）が生まれた。この子が将来、石川啄木という雅号の偉大な詩人となるのである。

2度、私は彼の父親と心の中で国中を放浪した。彼は自分の身近な人たちが苦しい生活を送っているのを見兼ねて、長い間家を空けていたのだ。

詩人と同じように、私は北海道の砂山を心の中で歩くのが好きだった。



1957年から58年にかけて、この学校で村の子供たちに石川啄木の素晴らしい詩歌を読み聞かせていた。



若かりし頃の村の教師、グドラト・イスマイルザデ(1957年)

砂山の砂に腹這ひ  
初戀の  
いたみを遠くおもひ出づ  
る日

私は幼い啄木が育った渋民村も訪れた。見た目にみずぼらしい村で、農民たちの暮らしは辛く厳しかったが、周囲は美しい山や川、白樺林に囲まれていた。石川啄木は自分の村をこよなく愛し、この村と村の人々を生涯に渡って愛し続けた。離れた所にあつては、彼はこの村を思い焦がれていた。

かにかくに渋民村は戀しかり  
おもひでの山  
おもひでの川

心の中で何度も私は、函館にある詩人の墓の前で悲嘆に暮れながら頭を垂れ、私に

とって神聖な墓碑の銘を、心を痛めながら読んだものである。

東海の小島の磯の白砂に  
われ泣きぬれて  
蟹とたはむる

この詩も他の多くの作品も、まるで最も優しい音楽が具現されているようであり、この詩人の存命中に民謡となっている。詩人の死後、これらの句が巨大な石に刻み込まれ、その歌碑が渋民村を流れる北上川の川岸に立てられたことは注目に値する。

詩人は肺結核で非常に若くして亡くなった。死期は彼自身分かっていた。彼は自分の運命が分かっていたし、個人の幸せなどありえないこと

を自覚していた。そして彼は悲しみに溢れた詩を書いた。それと同時に彼は生を愛し、日本の明るい未来を信じていた。

新しき明日来るを信ずといふ  
自分の言葉に  
嘘はなけれど——

詩人は1912年4月13日に亡くなった。今年はその没後100年目である。詩人の名前は何百年、何千年が過ぎようとも、高潔な世代の記憶の中に生き残り続けると信じている。◆

